

日蓮大聖人御書全集

じっししょうしょう

十章抄

新版
1664
S
1667

十章抄

ぶんえい ねん がつ さんみぼう

文永8年(71) 5月* 三位房

けごんしゆう もう しゆう けごんぎやう えん ほけきやう えん いち

華嚴宗と申す宗は、「華嚴經の円と法華經の円とは一な

ほけきやう えん けごん えん しようまつ うんぬん

り。しかれども、法華經の円は華嚴の円の撰末」と云々。

ほつそう さんろん てんだいしゆう か ぎ どう

法相・三論、またまたかくのごとし。天台宗、彼の義に同

べつしゆう た 何 れい ほつけ ねはん ひと

せば、別宗と立ててなにかせん。例せば、法華・涅槃は一

えん せんご ねはん 劣 定 にぜん

つの円なり、先後によつて涅槃なおおとるとさだむ。爾前の

えん ほつけ えん いち せんご ほつけ おと

円、法華の円を一とならば、先後によりて法華あに劣らざ

せん せん じゃぎ 起 みよう か

らんや。詮ずるところ、この邪義のおこり、「この妙と彼の

みよう えん じつ こと えんどん ぎ ひと ささき

妙と「円なること実には異ならず」「円頓の義は齊し」「前

みつ そ とう しゃく 化

の三つを麤となす」等の釈にばかされて起こる義なり。

しかん もう えんどんしかん しょうもん げこんきよう もん 引

止観と申すも、円頓止観の証文には華嚴經の文をひきて

そうろう に まき ししゅざんまい たぶん ねんぶつ み そうろう

候ぞ。また二の卷の四種三昧は、多分は念仏と見えて候

みなもとにぎ なが きよ もう

なり。「源濁れば流れ清からず」と申して、爾前の円と

ほけきよう えん ひと もう もの しかん ひと 読 そうろう

法華經の円と一つと申す者が止観を人によませ候えば、た

ねんぶつしゃ そうろう

だ念仏者のごとくにて候なり。

しかん しゃくもん い ほんもん い

ただし、止観は迹門より出でたり、本門より出でたり、

ほんじやく わた もう みつ 古

本迹に亘ると申す三つの義、いにしえよりこれあり。これ

はしばらくこれをおく。置「故に知んぬ、一部の文共に円乗

かいごん みょうかん じよう もう しかんいちぶ ほけきよう

開権の妙観を成ずることを」と申して、止観一部は法華経

かいえ うえ こんりゆう もん にぜん きようぎよう 引 ないし

の開会の上に建立せる文なり。爾前の経々をひき、乃至

げてんもち そうろう にぜん げてん こころ もん 借

外典用いて候も、爾前・外典の心にはあらず。文をばか

ぎ 削 捨 きよう むかし よ

れども義をばけずりすてたるなり。「境は昔に寄すといえ

ち かなら えん よ もう もんじゆもん ほうどう しようかんのん

ども、智は必ず円に依る」と申して、文殊問・方等・請観音

とう しよきよう ひ ししゆ た こころ かなら ほけきよう

等の諸経を引いて四種を立つれども、心は必ず法華経な

しよもん さんいん いちだい か もん たい しやうい

り。「諸文を散引すること一代を該ぬれども、文の体の正意

にきよう き もう

はただ一経のみに帰す」と申す、これなり。

しかん じつしよう たいい しゃくみよう たいそう しょうほう へんえん ほうべん

止観に十章あり。大意・釈名・体相・撰法・偏円・方便・

しょうがん かほう ききよう しき さき ろくじゅう しゅたら よ

正観・果報・起教・旨帰なり。「前の六重は修多羅に依る」

もう たいい ほうべん ろくじゅう さき しかん かぎ

と申して、大意より方便までの六重は先の四巻に限る。こ

みょうげ しゃくもん こころ 述 いま みょうげ よ

れは妙解にして、迹門の心をのべたり。「今は妙解に依つ

しょうぎよう た もう だいしち しょうかん じつきよう

て、もつて正行を立つ」と申すは、第七の正観、十境

じゅうじよう かんぼう ほんもん こころ いちねんさんぜん

十乗の観法、本門の心なり。一念三千これよりはじまる。

いちねんさんぜん もう しゃくもん ゆる

一念三千と申すことは迹門にすらなお許されず。いかにい

にぜん ぶん 絶 いちねんさんぜん しゅつしよ

わんや、爾前に分たえたることなり。一念三千の出処は

りやくかいさん じゅうによじつそう ぎぶん ほんもん かぎ にぜん

略開三の十如实相なれども、義分は本門に限る。爾前は

しやくもん

えぎはんもん

しやくもん

ほんもん

えぎはんもん

しんじつ

迹門の依義判文、迹門は本門の依義判文なり。ただし、真実

えもんはんぎ

ほんもん

かぎ

の依文判義は本門に限るべし。

えん

ぎよう

すな

数

たいかい

見

されば、円の行まちまちなり。沙をかずえ、大海をみる、

えん

ぎよう

にぜん

きよう

みだ

なお円の行なり。いかにいわんや、爾前の経をよみ、弥陀

とう

しよぶつ

みようごう

とな

じじ

ぎよう

等の諸仏の名号を唱うるをや。ただし、これらは時々行

しんじつ

えん

ぎよう

じゆん

つね

くち

なるべし。真実に円の行に順じて常に口ずさみにすべき

なんみようほうれんげきよう

こころ

そん

いちねんさんぜん

ことは南無妙法蓮華経なり。心に存すべきことは一念三千

かんぼう

ちしや

ぎようげ

にほんこく

ざいけ

もの

の観法なり。これは智者の行解なり。日本国の在家の者に

いっごう

なんみようほうれんげきよう

唱

は、ただ一向に南無妙法蓮華経となえさすべし。

な かなら たい 至 とく ほけきよう じゆうしちしゆ な
名は必ず体にいたる徳あり。法華經に十七種の名あり。

つうみよう べつめい さんぜ しょぶつ みな なんみようほうれんげきよう
これ通名なり。別名は、三世の諸仏、皆、南無妙法蓮華經

付 たま あみだ しゃかとう しょぶつ いんい とき
とつけさせ給いしなり。阿彌陀・釈迦等の諸仏も、因位の時

かなら しかん くち かなら なんみようほうれんげきよう
は必ず止觀なりき。口ずさみは必ず南無妙法蓮華經なり。

知 てんたい しんごんとう ねんぶつしや くち
これらをしらざる天台・真言等の念仏者、口ずさみには

いっこう なむあみだぶつ もう ざいけ もの いっこう おも
一向に南無阿彌陀仏と申すあいだ、在家の者は一向に念う

様 てんたい しんごんとう ねんぶつ ぜんどう ほうねん
よう、「天台・真言等は念仏にてありけり」。また善導・法然

いちもん てんたい しんごん ひとびと まこと じしゆう かな
が一門は、「すわすわ、天台・真言の人々も実に自宗が叶い

ねんぶつ もう 煩 がく
がたければ念仏を申すなり。わすらわしくかれを学せんよ

ほけきょう 読

いつこう ねんぶつ もう

じょうど

りは、法華經をよまんよりは、一向に念仏を申して、浄土に

ほけきょう

覚

もう

ぎ にほんこく

じゅうまん

して法華經をもさとるべし」と申す。この義、日本国に充満

ゆえ

てんだい

しんごん

がくしや

ざいけ

ひとびと

捨

せし故に、天台・真言の学者、在家の人々にすてられて、

ろくじゅうよしゆう

さんじ

失

果

六十余州の山寺はうせはてぬるなり。

くじゅうろくしゆ

げどう

ぶつえびく

いぎ

起

にほんこく

九十六種の外道は仏慧比丘の威儀よりおこり、日本国の

ほうぼう

にぜん

えん

ほつけ

えん

いち

ぎ

さか

謗法は爾前の円と法華の円と一という義の盛んなりしより、

始

哀

げどう

じょう

らく

が

これはじまれり。あわれなるかなや。外道は常・楽・我・

じょう た

ほとけよ

出

座

たま

く

くう

浄と立てしかば、仏世にいでませ給いては、苦・空・

むじょう

むが

説

たま

にじょう

くうがん

じゃく

だいじょう

無常・無我ととかせ給いき。二乗は空觀に著して大乘に

進

ほとけいまし

のたま

ごぎやく

ほとけ

種

すすまざりしかば、仏ほとけ誠めて云わく「五逆は仏のたね、

じんろう ともがら によらい たね にじよう ぜんぼう ようふじよう きら たま

塵勞の疇は如来の種、二乗の善法は永不成」と嫌わせ給い

じようらくがじよう ぎ げどう 悪 な 善

き。常楽我淨の義こそ外道はあしかりしかども名はよかり

ほとけ な 忌 たま あく ほとけ

しぞかし。しかれども、仏、名をいみ給いき。悪だに仏の

たね 善 覚 ほとけ にじよう

種となる。ましてぜんはとこそおぼうれども、仏、二乗に

む あく ゆる ぜん 誠 たま

向かつては悪をば許して善をばいましめ給いき。

とうせい ねんぶつ ほけきよう くに うしな ねんぶつ 善

当世の念仏は法華經を国に失う念仏なり。たといぜんた

ぎぶん 当 な 忌

りとも、義分あたれりというとも、まず名をいむべし。そ

ゆえ ぶつぼう くに したが てんじく いっこうしじよう いっこう

の故は、仏法は国に随うべし。天竺には一向小乗・一向

だいじよう

だいしようけんがく

くに 相 分

しんたん

大乘・大小兼学の国あいわかれたり。震旦またまたかく

にほんこく

いつこうだいじよう

くに

だいじよう

なか

いちじよう

くに

のごとし。日本国は一向大乘の国、大乘の中の一乗の国

けごん

ほつそう

さんろんとう

しよだいじよう

そうおう

なり。華嚴・法相・三論等の諸大乘すら、なお相応せず。

しようじよう

さんしゆう

とうせい

流行

いかにいわんや小乗の三宗をや。しかるに、当世にはや

ねんぶつしゆう

ぜんしゆう

みなもと

ほうとうぶ

こと起

る念仏宗と禅宗とは、源、方等部より事おこれり。

ほつそう

さんろん

けごん

けん

い

法相・三論・華嚴の見を出さべからず。

なむあみだぶつ

にぜん

ほけきよう

おうじよう

南無阿弥陀仏は爾前にかぎる。法華経においては往生の

ぎよう

かいえ

のち

ぶつじん

なんみようほうれんげきよう

行にあらず。開会の後、仏因となるべし。南無妙法蓮華経

しじゆうよねん

ほつけはちかねん

なむ

は四十余年にわたらず、ただ法華八箇年にかぎる。南無

あみだぶつ かいえ

ほけきよう のうかい ねんぶつ しよかい

阿弥陀仏に開会せられず。法華経は能開、念仏は所開なり。

ほけきよう ぎようじや いちごなむ あみだぶつ もう

法華経の行者は、一期南無阿弥陀仏と申さずとも、南無

あみだぶつ じっぽう しよぶつ くどく そな たと

阿弥陀仏ならびに十方の諸仏の功德を備えたり。譬えば、

によいほうしゆ きんぎんとう たから そな ねんぶつ いちご

如意宝珠のごとし。金銀等の財を備えたるか。念仏は一期

もう ほけきよう くどく 具 たと きんぎんとう

申すとも、法華経の功德をぐすべからず。譬えば、金銀等の

によいほうしゆ 重 たと さんぜんだいせんせかい つ

如意宝珠をかねざるがごとし。譬えば、三千大千世界に積み

きんぎんとう たから ひと によいほうしゆ 替

たる金銀等の財も、一つの如意宝珠をばかうべからず。

かいえ 覚 ねんぶつ たいない ごん

たとい開会をさとれる念仏なりとも、なお体内の権なり、

たいない じつ およ とうせい かいえ こころ 得

体内の実に及ばず。いかにいわんや、当世に開会を心えた

ちしや すく

ひと

る智者も少なくこそおわせんずらめ。たといさる人ありと

でし けんぞく しよじゆう

も、弟子・眷属・所従なんどはいかんがあるべかるらん。

ぐしや ちしや ねんぶつ もう たも 見 ねんぶつしや みそうろう

愚者は、智者の念仏を申し給うをみては、念仏者とぞ見候

ほけきよう ぎようじや そうら なんみようほうれんげきよう

らん。法華経の行者とはよも候わじ。また南無妙法蓮華経

もう ひと ぐしや ほけきよう ぎようじや もう そうら

と申す人をば、いかなる愚者も法華経の行者とぞ申し候

とうせい ふぼ ころ ひと むほん ひと

わんずらん。当世に父母を殺す人よりも、謀反おこす人よ

てんだい しんごん がくしや ぜんこう らいさん 謳 ねんこう

りも、天台・真言の学者といわれて善公が礼讃をうたい然公

ねんぶつ 轉 ひとびと 恐 そうろう

が念仏をさええずる人々はおそろしく候なり。

ふみ しかん 読 上 たま のち 文 座 ひと

この文を、止観よみあげさせ給いて後、ふみのざの人に

弘

たも

しかん

たま

速

ひろめてわたらせ給うべし。止観よみあげさせ給わば、すみ

おん 渡

そうら

さた

もと

にちれん

どうり

やかに御わたり候え。沙汰のことは、本より日蓮が道理だ

強

ことき

ぞん

そうら

ひと

にもつよくば事切れんことかたしと存じて候いしが、人ご

もんちゆう

ほうもん

似

もう

とに「問注は、法門にはにず、いみじゆうしたり」と申し

そうろう

ことき

覚

そうら

しょうひつどの

候なるときに、事切るべしともおぼえ候わず。少弼殿よ

へいのぎぶろうぎえもん

許

そうろう

承

り平三郎左衛門のもとにわたりて候とぞうけたまわり

そうろう

延

そうら

もんちゆう

おんこころ得そうら

候。このことのび候わば、問注はよきと御心え候え。

き

そうら

き

またいつにても、よも切れぬことは候わじ。また切れずば

にちれん

どうり

ひとびと

思

そうら

「日蓮、道理」とこそ人々はおもい候わんずらめ。くるし

く候そうらわそうらず候。そうら

当時は、とうじ ことに天台・真言等の人々の多く来り候てんだい しんごんとう ひとびと おお きた そうらなり。

事多ことき故おに留ゆえめ候とどいそうら了おわんぬ。